統計図表シリーズ (2)

戦後の凶悪犯罪推移

1. どうしてこのような図表としたか

戦後殺人，強盗，放火，強姦等の凶悪犯罪がどのような動きを示しているかを見るために，このような線図表とした。線図表は線の高低により数値の大小を比較すると共に，統計系列の連続した動きを示す図表である。即ち，時刻別の火災発生件数とか，月別の出生死亡数等時の流れによつて変化する統計数値を図表化する場合に用いられるものである。

2. 作図にあたつて注意したところ

(イ) 基軸線は棒図表と同様に，目盛線より太く引いた。

(ロ) 数値の最高は昭和23年の強盗225件であつたが目盛をきざむときは，区切のよい200までとし，あとは判読してもらうことにした。

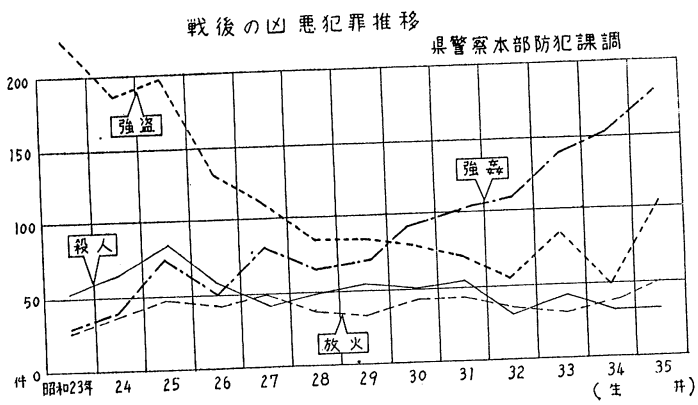
(ハ) この統計は動態統計であるので，各数値をグラフ上にしるす場合，年を区切る区画線の中間にしるした。これが静態統計であれば，区画線のところにしるせばよい。

(ニ) 線の本数であるが，この場合はたまたま凶悪犯罪といわれているものが4種類であつたので，線の本数も4本となつたのであるが，時によつては7本も8本も画きたいようなこともあると思われるが，線の本数は5本程度が限度である。

3. この図表はなにを物語つているか

時代の移り変りを物語るものとして興味深いものがある。戦後の23年から25年まで，ものとり，いわゆる強盗が目立つて多いが，これを見ると当時の食糧難，物資不足を思い出させる。全体的に時とともに，これらの凶悪犯が減少しつつあることは，世の中も少しづつ落付をとりもどしている様子がうかがわれる。

ただ，30年頃から最近までずつと，強姦が上向になつていることは気にかかることである。そしてこの原因が好奇心，情痴，出来心等が多く，年令別では16才から25才までが半数以上を占めていることを考えてみると今日の映画やいかがわしい雑誌等，マスコミの影響も多分にあるのではないかと思われる。またこのようなことから道徳教育ということも浮び上つてくるのではなかろうか。しかし，また一方には若い人達の結婚問題，経済問題等も遠因があると考えられる。　（生井）



事　務　革　新

丹　藤　一

ちかごろ，めざましい経済成長のおかげで，いたる所で人手不足があらわれ，日本は人口過剰，といつた観念の抜け切れないでいるわれわれを驚ろかした。この人手不足の生じた原因，また，それの及ぼした波紋については，すでに新聞雑誌に広く取り上げられており，ここにあらためて書くまでもないが，昨年暮から始まつた値上げブームの波に，この人手不足といつた現象が加わつて物の値段をさらに高めているのは，われわれ公務員にとつて不幸な話である。なぜなら，役人の給料が低いということで，ベースアップがやつと何年振りかで行なわれたと思つた途端に，そのアップ分が，あつという間に物価の値上りによつて埋められてしまつたからである。これを見ても，物を生産しない公務員の弱さというものをつくづく感ずるのだが——。

それはさておき，この人手不足の現象の一つに，技術者の不足があげられている。最近の新聞の広告を見ているとよくそれが分かるが，一流メーカーといわれる所がきそつて技術者を募集している。募集範囲も広がつて，年令はたいてい35才まで，応募締切の期限なしというのまである。たとえば最近のつた，M重工業の技術者募集の広告を見ると，募集内容は，産業機械の設計技術者，化工業の設計技術者，諸機械，構造物据付工事技術者，電気技術者といつたところで，今花形の電子工学関係の技術者の募集もまた多いようだ。栄枯盛衰は世の習いというが，今ほど（いや今後ほど）技術者様々の世はあるまい。

このような技術者不足の意味するものが，過去2，3年の間の花やかな流行語であつ，た企業の体質改善，あるいは技術革新といわれるものに関係あることは容易に推測できることである。

そこで今，技術革新がおさめた成果のうちに，いわゆる事務というものが，どのような変革を見せたかを考えて見るのが，実はこの小文の目的なのである。

承知のように，公務員の職には事務吏員と技術吏員の二つの分け方があつて，実は私は昔からこの分け方に不思議をいだいていた。つまり，技術と事務と相対する時の事務とは一体何であるのか，たとえば会計事務といつた場合，会計（たとえば）複式簿記に習熟することは，一つの技術ではないのかといつた疑問である。

技術革新という言葉がもてはやされていたときに，事務革新という言葉はついぞ聞かれなかつた。もつとも，それに類した言葉で，事務機械化とか，事務能率化とかいつた言葉があるにはあつたが——。

これは要するに，技術の（広い意味での技術の）伴なわない事務は，事務とは言えないことから，技術革新といつた言葉の中には，すでに事務の革新を含んでおり，事務の革新の実行策としての一つの方策として事務機械化があげられていたのだと思う。

今日の人手不足を，もう一度よく眺めて見ると，単純な仕事をする人手がきわめて足りないようであるが，これらの単純な仕事は，機械ででもできる仕事であつて，その機械を入れる力のない所で，人手不足に悩んでいるともいえる。

一方，事務機械を導入したところでは，も早事務屋は必要がないかわりに，そうした機械を扱う技術者が不足しているわけである。したがつて，技術革新の（つまり事務革新の）行なわれている職場では，従来の事務屋の領域に，技術屋が進入しつつあるから，今まで事務屋といわれてきた者は，悲しいかな滅び行く種族であるといえるかも知れない。

事務革新ということを考える時に，私はいつか訪問したことのある東京都庁を思い出す。あの都庁の建物が，建物としていろいろと評判になつたことは聞いていたが実際に建物の中に入つて見ると，天井が低く，廊下も狭くて，その狭い廊下には，ロツカーが両側にずらりと並び，各部屋にはぎつしり人がつまつていた。狭い空間を最大限に生かしたその設計は，建物の持つ機能が，人間の能力を最大限に引き出すためになされたことをよく感じさせたが，しかしそれは，今までの古い事務処理組織から，いかにして最大のものを引き出そうかという考えであつて、あのふくれあがつた人の集団を見ていると，事務処理組織の行きづまりがしみじみ感じられた。事務革新のない限り，いくら庁舎を増築しても，すぐ人で一杯になつてしまうことは間違いあるまい，と思いながら，都庁を出てあらためて庁舎を眺めて見ると，道路に面しない側の，あの無数の小さな矩形でしきられたデザインは，ちようどバタリー方式の鶏舎のようで，いささか設計者の頭のよさに腹を立てたが，もしも役所にもつと事務革新が行なわれていたならば，あの建築は，また別のものであつたろうにと思つたものである。